

栗林遺跡

発掘調査報告書

1995-3

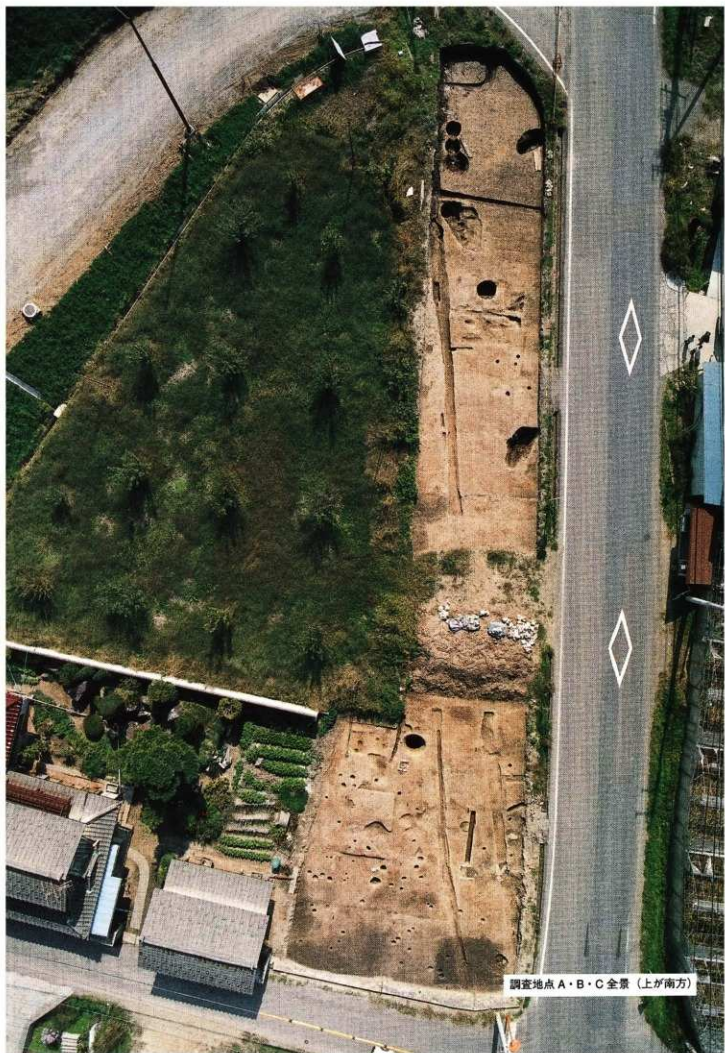
中野市教育委員会

栗林遺跡

発掘調査報告書

1995 - 3

中野市教育委員会



調査地点A・B・C全景（上が南方）

刊行にあたって

この度、県道安源寺七井停車場線栗林交差点改良拡幅工事に伴う、埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

本発掘調査により、北信濃の代表的な弥生時代中期遺跡である栗林遺跡の重要性を再確認する貴重な遺構や資料を得ることができ、中野市の歴史に新しいページを加えることができました。

これもひとえに、長野県中野建設事務所をはじめ多くの方々のご協力の賜であります。ここにあつく、御礼を申し上げます。

中野市教育委員会としまして今後も、開発と文化財保護の調和をはかるべく努力してまいりますので、一層の文化財保護行政にご協力をお願いいたします。

平成7年3月

中野市教育委員会

教育長 小林 治己

凡 例

- 1 本書は、県道中野～豊野線バイパス・志賀中野有料道路に関連する。県道安源寺～上今井停車場線の栗林交差点の改良拡幅工事に伴う、栗林遺跡の発掘報告書である。
- 2 発掘調査は中野建設事務所の委託に基づいて中野市教育委員会（教育長 小林治己）が行った。
- 3 調査時の遺構整理番号は、報告書では新番号に切り替え対照表をつけた。
- 4 注は文節ごとに示し、引用・参考文献はあとに一括して表示した。
- 5 執筆は檀原長剛が行い、編集は檀原が行った。
- 6 この栗林遺跡の調査の記録と出土遺物は、中野市歴史民俗資料館が保管している。

新旧编排番号对照表

新番号	旧番号
第1号上坑	B-SK 1
第2号上坑	A-SK 1
第3号上坑	C-SK 2
第4号上坑	C-SK 1
第5号上坑	C-SK 3
第6号上坑	C-SK 4
第7号上坑	C-SK 5
第8号上坑	C-SK 6
第9号上坑	C-SK 7
第1号溝	C-SD 1
第2号溝	D-SD 2
第3号溝	D-SD 3
第4号溝	A-SD 4
第5号溝	C-SD 1
第6号溝	C-SD 2
井戸	B-SE 1
第1号柱穴	BA-1 P 1
第2号柱穴	BA-1 P 3
第3号柱穴	BA-1 P 2
第4号柱穴	BA-1 P 4
第5号柱穴	BB-1 P 1
第6号柱穴	BB-1 P 2
第7号柱穴	BB-1 P 3
第8号柱穴	BB-1 P 8
第9号柱穴	BB-1 P 5
第10号柱穴	BB-1 P 6
第11号柱穴	BB-1 P 7
第12号柱穴	BB-1 P 8
第13号柱穴	BB-1 P 9
第14号柱穴	BB-1 P 10
第15号柱穴	BC-1 P 3
第16号柱穴	BD-1 P 1

新番号	旧番号
第17号柱穴	BC-1 P 1
第18号柱穴	BC-1 P 2
第19号柱穴	BD-2 P 9
第20号柱穴	BD-1 P 2
第21号柱穴	BD-2 P 8
第22号柱穴	BD-2 P 7
第23号柱穴	BC-2 P 1
第24号柱穴	BB-2 P 8
第25号柱穴	BA-2 P 1
第26号柱穴	BB-2 P 1
第27号柱穴	BB-2 P 2
第28号柱穴	BB-2 P 3
第29号柱穴	BB-2 P 4
第30号柱穴	BC-2 P 2
第31号柱穴	BC-2 P 3
第32号柱穴	BC-2 P 4
第33号柱穴	BD-2 P 1
第34号柱穴	BD-2 P 2
第35号柱穴	BD-2 P 3
第36号柱穴	BD-2 P 4
第37号柱穴	BD-2 P 6
第38号柱穴	BD-2 P 5
第39号柱穴	BC-2 P 5
第40号柱穴	BC-2 P 6
第41号柱穴	BB-2 P 5
第42号柱穴	BB-2 P 6
第43号柱穴	BB-2 P 7
第44号柱穴	BB-3 P 1
第45号柱穴	BB-2 P 2
第46号柱穴	BB-3 P 2
第47号柱穴	BB-3 P 1
第48号柱穴	BB-3 P 2
第49号柱穴	BB-3 P 3
第50号柱穴	BB-3 P 1
第51号柱穴	BB-3 P 2

新番号	旧番号
第52号柱穴	BB-3 P 1
第53号柱穴	BB-4 P 1
第54号柱穴	BB-4 P 5
第55号柱穴	BC-4 P 1
第56号柱穴	BD-4 P 1
第57号柱穴	BD-3 P 2
第58号柱穴	BD-4 P 2
第59号柱穴	BD-4 P 3
第60号柱穴	BC-4 P 2
第61号柱穴	BC-4 P 3
第62号柱穴	BC-4 P 6
第63号柱穴	BC-4 P 4
第64号柱穴	BA-3 P 2
第65号柱穴	BA-4 P 1
第66号柱穴	A-NO 1
第67号柱穴	A-NO 3
第68号柱穴	A-NO 2
第69号柱穴	A-NO 4
第70号柱穴	A-NO 5
第71号柱穴	A-NO 6
第72号柱穴	CB-10 P 1
第73号柱穴	CA-10 P 1
第74号柱穴	CB-11 P 2
第75号柱穴	CB-11 P 3
第76号柱穴	CB-11 P 1
第77号柱穴	D-1 P 1
第78号柱穴	D-1 P 2
第79号柱穴	D-1 P 3
第80号柱穴	D-1 P 4
第81号柱穴	D-1 P 5
第82号柱穴	D-1 P 6
第83号柱穴	D-2 P 1
第84号柱穴	D-2 P 2
第85号柱穴	D-2 P 3

本文目次

巻頭図版

序文

凡例

新旧遺構番号対照表

第1章 調査地周辺の環境	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	2
第3節 遺跡の学史	6
第4節 順序	12
第II章 遺構と遺物	13
第1節 縄文時代	13
1 遺物	13
土器	
石器	
第2節 弥生時代	14
1 遺構	14
上坑(墳)	
溝址	
柱穴	
2 遺物	17
土器	
石器	
第3節 平安時代	24
1 遺物	24
土器	
第4節 近世	24
1 遺構	24
井戸と柱穴	
2 遺物	25
陶磁器	
土器	

第5節 現代	27
1 遺構	27
道路と溝址	
肥え溜址	
2 遺物	27
瓦	
第Ⅲ章 まとめ	29

挿図目次

第1図 栗林遺跡の位置	1
第2図 栗林遺跡調査地点の位置	3
第3図 調査地付近の明治の地籍図	5
第4図 栗林遺跡の既発掘調査地	7
第5図 土層模式図	11
第6図 調査地点の遺構配置(1)	13
第7図 調査地点の遺構配置(2)	14
第8図 土器拓影図	15
第9図 石器実測図	17
第10図 土坑実測図	18
第11図 溝址実測図	19
第12図 掘立柱柱穴実測図	20
第13図 柱穴実測図(1)	21
第14図 柱穴実測図(2)	22
第15図 土器・石器実測図	23
第16図 井戸実測図	25
第17図 近・現代遺物実測図	26
第18図 肥え溜址実測図	28

写真目次

写真1 東から見た栗林遺跡	33
2 西から見たD1の土器集中	33
3 東から見たD2の溝址	33
4 A地点の遺構検出	34
5 第4号溝と第2号土坑	34
6 第4号溝の検出	34
7 第2号土坑の断面	34
8 南から見たB地点	35
9 第1号土坑	35
10 井戸の遺物検出	35
11 井戸の縁起物荷牛の検出	35
12 井戸の木材検出	36
13 井戸底の木材	36
14 北から見たB地点の遺構	36
15 南から見たC地点の遺構	37
16 C地点第5号土坑	37
17 C地点第3号土坑	37
18 C地点第6号土坑	37

第I章 調査地周辺の環境

第1節 遺跡の立地

中野市は長野県北東部に位置し、長野盆地の北端にあり、南は延徳低湿地に、西は千曲川、東は志賀高原から派出した山脈が境界で、北は高社山(1351.5m)が聳えて境界となり、この山により気候が北日本型との境界をなしている。

市の大部分は、上信国境に発する夜間瀬川によって形成された中野扇状地上にあり、それを囲む山麓の小扇状地と、西部の丘陵沿い、丘陵上にある集落に囲まれている。

中野市は新生代第三紀中新世(3500万年前)にはフォッサ・マグナ(糸魚川-静岡構造線・大きな裂け目)の東部にあたるとされ、その後の火山活動などによって隆起をつづけ、陸化するとともに現状の姿になったものと推定されている。

善光寺平(長野盆地)のほぼ中央を北流した千曲川は、中野市立ヶ花に至ると、川幅の狭い段丘地形に入り、洪水時にはここで滞留し、延徳低湿

地などに逆流して一大湖沼化してきた。しかし近年は排水機場の整備によって、水害を免れている。

この延徳低湿地は今も沈降をつづけているのに対し、この西部丘陵(長丘・高丘丘陵)は左岸の丘陵とともに、隆起をつづけており、千曲川は下刻作用によって流路を保っている。西方の標高500~600mの赤壇面には、はるか昔の千曲川の侵食作用による段丘面がみられる。

東方の標高400~500mの長丘丘陵も千曲川によって形成された平坦面で、侵食による段丘地形を各所に残している。この段丘は、高位より赤壇面・長丘面・草間面・原面・栗林面の5段に区別される。〔中野市誌〕自然編1981。

この丘陵には地殻変動の褶曲作用による小丘が見られ、土器作りに適する粘土の堆積、須恵器焼成窯の築造などの条件をみたしている。この丘陵の東麓、中野扇状地面との境と、千曲川沿いには括断層の存在を指摘されている〔日本第四紀地図〕。

栗林遺跡は、この高丘丘陵の西端を限る千曲川の段丘上に所在し、明治5(1872)年の曲流した流路変更工事以前の河岸段丘(自然堤防)上の栗林面にあり、標高330m前後に、長さ約1700m、幅300mの範囲に帯状に分布する遺跡と思われる。

遺跡の範囲は中野市栗林小字松原・北原・堤下・清水尻・梨子木・西原、野地などが該当し、とくに栗林式土器の濃厚な分布地は、松原・北原である。この地籍の南方は浜津ヶ池方面と、安瀬寺方面からくる小河川のため、低湿地帯となっており、かつての水田適地と思われる。

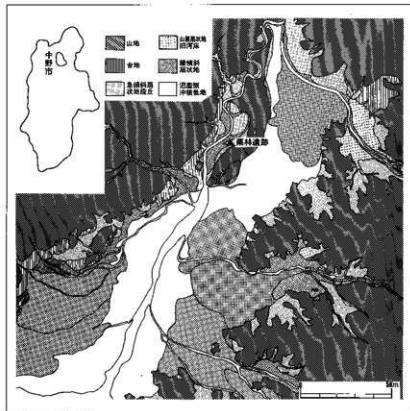


図1 栗林遺跡の位置

第2節 歴史的環境

中野平市西部に南北にみられる丘陵は、北半は長丘丘陵、南半は高丘丘陵と呼ばれ、総称して現在西部丘陵と呼ばれている。この丘陵からは旧石器時代（岩宿時代と呼ぶ人もある）の遺物が発見されている。北より厚貝・永峯遺跡（ナイフ形石器）、同・袖山遺跡（石刃・尖頭器）、栗林・浜津ヶ池遺跡（ナイフ形石器・彫刻器・掻器・石刃）、栗林遺跡・F区（上原）（ナイフ形石器・掻器）、安源寺・宮裏遺跡（ナイフ形石器・彫刻器・掻器・石刃）、立ヶ花表遺跡（ナイフ形石器・彫刻器・掻器・石刃）、立ヶ花沢田銅土遺跡第Ⅱ地点（マイクロブレード・スクレパー・コア・打製石斧・磨石）などがあり、従来はこの丘陵の旧石器時代の遺物は、黒耀石製のナイフ形石器の盛行する、後期末に近い時期のものが多く指摘されていた。

しかし1995年の沢田銅土遺跡の調査で、飯田市石子原遺跡や、信濃町野尻湖の仲町遺跡出土品と同時期と思われる、珪岩や頁岩を素材とした石器群が出土した。これは石刃技法の前の剥片系の石器であり、これらは広域テフラの蛤良火山灰（22000年前）の下層と、推定される地層から発見されており、前期旧石器時代の終末と後期旧石器時代の中間に位置するものと推定される。

また1994年の沢田銅土遺跡調査では、マイクロブレード（細石刃）がまとまって出土し、この丘陵の旧石器時代の様相が次第に明らかになってきている。

この時代から縄文時代へ移行する「御子柴系文化」期の遺物は、牛出遺跡から発見された、頁岩製の御子柴型尖頭器がある。これは栗林面の沖積層から検出されている。

つぎの縄文草創期から早期、前期前葉の様相は、資料不足で判明しないが、中葉になるとこの千曲川のほとりに遺跡がみられるようになる。飯山市右尾遺跡の土器は関東の黒浜式土器と平行し、つぎの諸磯式系の南大原式土器は、諸磯a式（古）土器と平行し、この標識遺跡は栗林遺跡の対岸に位

置する。

つぎの段階の遺跡は、立ヶ花遺跡などがあり、諸磯b式からc式土器にかけた遺跡で、在地の土器に混じって、関東・中部高地・北陸などから搬入や、模倣された土器が検出されている。

前期末からの様相を大俣・姥ヶ沢遺跡からみると、諸磯c式末葉段階の土器から、北陸の新保式の影響がある土器、関東の御領ヶ台式系の上器が出土し、それらの交流を示す土器がある。つぎの北陸の新崎式段階には、この地方は汎北陸文化圏に属し、狭義には飯山市の深沢遺跡の深沢式（仮称）と同一で、客体として阿玉台式土器が作う。これは諏訪の猪沢式土器にもみられる文化相である。

北陸からの影響は中期後半までつづき、末葉段階の前半は東北の太木式、関東の加曾利E式、中南信の唐草文系土器などの影響のみみられる土器が散見されるが、資料が不足で説明は困難である。後半は平成3・4年の栗林遺跡の調査結果からも関東の加曾利E式系の傘下に、組み込まれたようである。

後期初頭の称名寺式の様相を示す土器は、栗林遺跡をはじめ千曲川流域に広く分布し、諏訪市の大安寺式と平行関係にあるとされている。

つぎの堀之内式土器も引き続き主体は、前様式から変化のたどれる様相を示すが、越後の三十稲場式や、東北方面の影響のみみられる土器も混在する。つぎの加曾利B式段階も関東地方の文化圏の影響下にあるが、遺跡数が減り、栗林遺跡では継続しない。

後期後半から晩期にかけては、さらに遺跡数が減り、中野市では現段階では系譜がたどれない。隣接する山ノ内町の佐野遺跡の土器をみると、東北の亀ヶ岡文化圏の影響下にありながら、中部山地の独自性のある佐野式土器の成立までには、東北や関東地方の影響のみみられる単独の三叉文の土器があり、三叉文が連鎖状に施文される土器から、佐野式土器とよんでいる。指標は鎌の手工、丁字



図2 栗林遺跡調査地点の位置

文、粗大工字文などの文様に変遷する。その後亀ヶ岡文化圏の影響がみられる、小諸市の水遺跡を標識とする水式土器が成立するが、この時代はすでに西日本は弥生式文化圏であり、中部山地は次第に中間地帯の弥生文化に取り込まれてゆく。

弥生前期の、北九州の遠賀川系土器は、長野市塩崎遺跡で確認されている。しかし中野市地域では確認されていない。これらの土器は尾張・美濃・三河地方に発達した条痕文系土器とともに県内に影響をあたえ、中期初頭には長野市の伊勢宮遺跡、新諏訪町遺跡などの土器が成立する。これは文様が篋指き沈線文で飾られた土器で、縄文も多用されている。

中期後半に位置づけられるのがこれらの系譜上にある中野市栗林遺跡である。これは千曲川流域を中心に隣県にも影響のみられる土器で、市内でもⅠ式段階からⅡ式段階と、次第に遺跡数も増加し、つぎの吉田式、箱清水式に継承され、スムーズに変化がたどれる。

(古代・中世・近世中期まで省略)

近世・現代

千曲川には古来より船による物資や、人の移動があった。このため栗林にも渡船場があった。明治3年(1870)に始まる下内郡豊田村上今井地籍の千曲川流路変更工事以前の栗林遺跡は、蛇行する千曲川に面しており、流れが滞留して船着場には好適地であった。近世後期の栗林船着場は、中野市場における、船運による最短距離の位置を占めていた。

長野冬季オリンピック関連として計画された中野～志賀道路の事前遺跡調査で、栗林・山下地籍の旧川面(現水田面)から20数mのぼった高台に、土塁に囲まれた建物跡と思われる箇所が発見された。ここは旧集落のあったと言われる、南側の高台にあたり、川岸に向かって木戸的な地勢を示し、湯本軍一氏によると、船番所の遺構ではないかと指摘されている。これは発掘調査対象地から、はずれていたため確定できないが、中世にさかのぼる可能性のある遺構である。史料上では、近世の

高井郡栗林村千曲川通船船着場は、県道安源寺～上今井停車場線から東に50m入った旧流路の川岸にあり、先に述べた推定船番所跡は、ここより700mほど下流にあたる。

当初この船着場は、中野村の名主傳右衛門が、栗林村の同意を得て、ここに地所を借り受け開設しようとしたことに始まる(『中野市誌』歴史編)。しかし先に寛政2(1790)年に水内郡西大滝村の太左衛門に松代藩福島宿(須坂市)から西大滝村(飯山市)までの間、約51kmの通船の許可が与えられていた。以後、紆余曲折があったが、文政年間(1818～1829)に善光寺町(長野市)の小野厚連が越後新潟までの長距離通船を願っていた。

文政4年(1821)、幕府の栗林村河岸場設置のお尋ねにたいして沿岸の諸村、村役人は、両側の縁を通る引舟については、田畑・用水路・渡船場・漁労場等差し障りないと同意文書を出している。

厚連は天保四年(1841)、5年季で通船10艘を許されたが、自らから船頭を雇って通船するのではなく、各地の河岸場の積問屋から料金をとって貸与し、仲間をつくって差配するようになった。この時、栗林村の武右衛門は、厚連への運上金を1ヵ年に永500文と銭5文、舟1艘につき永375文と銭79文を納付することで、荷積問屋通船の許可を得ている。

この通船の全盛は明治期までで、明治21年(1888)には国鉄直江津線、豊野駅が開業し、蟹沢～飯山間の通船が開設されたが、大正9年(1912)信越電力㈱が西大滝発電所建設のため、人口出資し飯山鉄道㈱が設立され、翌年、左岸の豊野～飯山間が開通した。さらに14年には河東鉄道㈱も中野～木島間が開通し、このように鉄道網の整備と合わせて道路網の整備によって、この千曲川通船も過去のものとなった。

中野市から三水村赤屋や豊田村穴田に通ずる、栗林～上今井間の千曲川の渡しは、江戸後期には、北園街道東脇道として往来が頻繁で、近在の村々によって、船守料が負担されていた。この渡しは明治5年(1871)新河道の完成後、船橋となっ

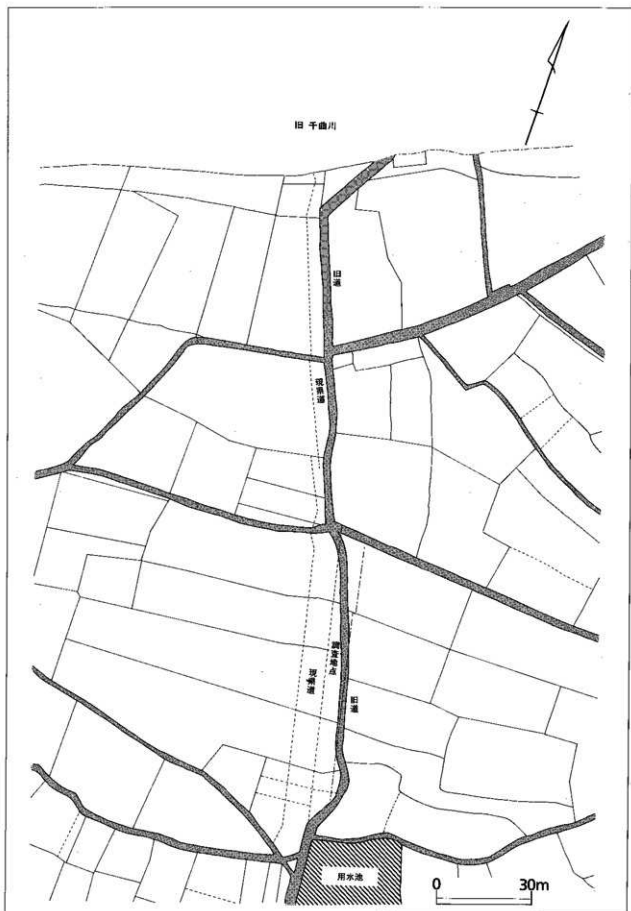


図3 調査地付近の明治の地籍図

た。最初は船3艘であったが、洪水の度に、とくに東岸が侵食され、(川の復元力・攻撃面)河幅が広くなり、明治35年(1902)には35艘が必要になったといわれている。

14年から17年までの渡橋銭が一人4厘で、その後1銭に値上げしたが、洪水の被害のため、年々赤字つづきであったという。大正12年(1923)に

第3節 遺跡の学史

栗林遺跡の存在が初めて文献に現われるのは、大正11年発刊の「下高井郡誌」で、歴史編の第一章「有史以前及び原史時代」の項目に「土器・石器・甲冑・刀剣・裝飾品等の発掘物」の表に、石斧・石鉋・砥石・石鏃などの出土が記載され、先住民の遺物の出土地として、近隣に知られていた。

この遺跡を初めて学会で紹介されたのは、この地方の考古学の先達神田五六氏である。氏は中野・山ノ内地方の小学校に通う傍ら、通路にあたる瓦粘土採取場から出土する土器・石器を採掘人々にいくばくかの報酬を与えて収集したと伝えられている。全面に広く掘るこの粘土採掘の人連には、黒色土層に遺物が包含されることを経験から知り、遺物の発見を楽しみにしていたという。

この採集された遺物をみた藤森栄一氏などのすずめもあって、氏は昭和6年(1931)に「信濃栗林の弥生式土器」(『考古学』6-10)と、翌年「信濃栗林の弥生式土器」(『考古学』7-7)を発表された。土器の文様は磨消縄文が多用され、鉋描沈線に変化に富んだ文様は、縄文文化の伝統を強く伝えるものとして、信濃の古式弥生式土器と認識されている。

その後、八幡・郎・森本六爾・藤森栄一氏などが現地を訪れ、これらの土器・石器について論考を発表され、昭和11年(1936)藤森は、後のⅠ式を中心に観察して、遠賀川系弥生式土器の影響下の古式弥生式土器として、栗林式として型式設定されている。

14年には「弥生式土器集成図録」を作成した森

なり、ようやく橋脚を打ち込んで、幅約3.5mの木橋が架設された。しかし洪水の度に橋板が撤去され、ウツ花の鉄橋への迂回が強いられた。

昭和27年(1952)になって、地区住民の悲願であった永久橋が、吊橋方式によって完成し、その後、高速交通網の発達に呼応して、新鉄橋が開通している。

本六爾・小林行雄氏等は、この栗林式土器を「中部高地第一様式」と位置づけている。しかしその後、皇国史観の全盛する暗黒な時期を迎え、立証的な学問は迫害された。これらの束縛から解放され、百八十度転回した戦後は、真実の歴史を求める機運が地方にもあふれ、衣食住とも貧しかった23年(1948)秋、下高井教育会が主催し、県費補助をうけて学術的な発掘調査が行われた。これは戦後の県下の考古学研究の先駆をなすもので、大陸の考古学的調査に従事され、一時この地方に住まわれた小野勝年氏、京都大学考古学教室坪井清足・横山浩一氏などその後、日本の考古学会をリードした人達が担当して発掘調査に当たった。トレンチ方式の発掘により、住居址2、集石状遺構(墓址)を検出し、土器など多数が出土した。

この発掘の成果は、長野県教委「下高井」(1953)に発表され、坪井は栗林式の土器をⅠ類・Ⅱ類に分類した。これはⅠ類が後のⅠ式に該当する部分が多く、Ⅱ類は同じくⅡ式に該当する部分を多くもっている。しかし周辺の遺跡の資料が少なかった当時の分類は、再検討の余地を残している。

第2次の調査は25年に私設道路の開設を期に、小野氏を指導者として高丘小・中学校の教職員・生徒によって行われた。この結果小野穴4基を検出し、1基から栗林式土器がセットで発見されている(小林義輝・小野勝年「第2次栗林遺跡発掘」(高丘小・中学校1950)。

戦後の歴史観の転換は、地方史の活発な活動を生み、戦前からの積み重ねのあった、長野県では

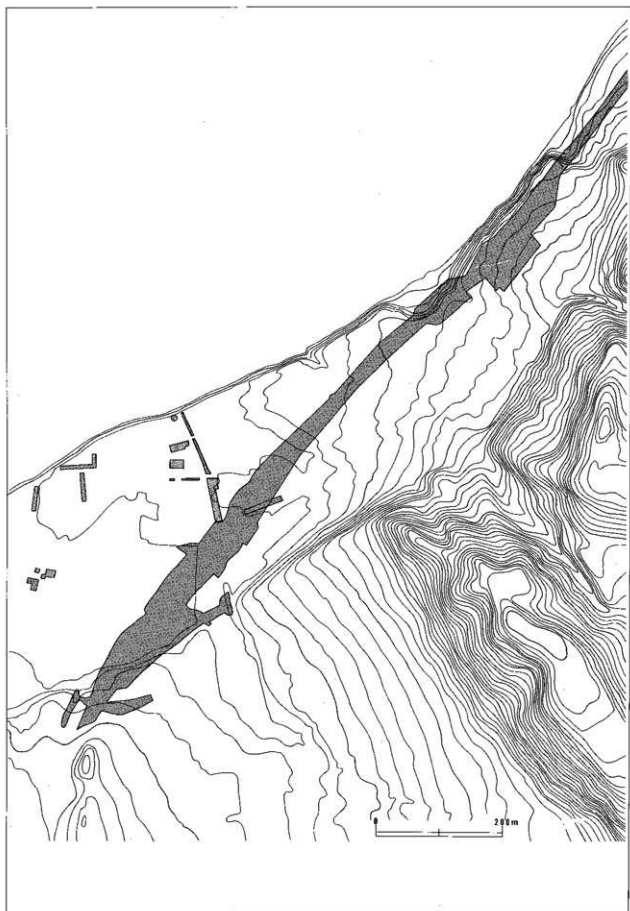


図4 梁林遺跡の既発掘調査地

一志茂樹氏の主唱により、『信濃史料』の発刊を企画し、県下の遺跡・遺物の集大成と、考古学研究の現状を総括して31年（1956）（『信濃史料刊行会『信濃史料』第1巻』（後に『信濃考古綜覧』上下）が発刊された。

ここでは畿内や県内の研究の深化により、栗林式土器は弥生時代中期中葉以降に位置づけることになった。ここでは永峯光一・桐原健氏は神田報文の2類土器をもって、型式概念を組み立てている。しかし資料の不足もあって、厳密な内容の把握に問題を残している。

35年千曲川流域に広く分布する弥生時代中期の標識遺跡として北原地籍31,000㎡の遺跡主要部が「泉史跡」に指定された。

38年（1963）、桐原健氏は第2次調査の出土資料を分析し、壺の文様の集約化・簡略化の傾向から栗林式土器を中期終末期の百瀬式（松本平）の先行形式としている（『栗林式土器の再検討』『考古学雑誌』49・3 1963）。

40年には開田工事のため、第3次発掘調査が行われ、住居址1、小竪穴1などが検出された（林茂樹ほか「長野県中野市栗林遺跡第3次調査概報」『信濃』18・4 1966）。

43年には岡谷市海戸遺跡の調査結果を踏まえて、百瀬式土器の細分案が示され、これらの中位の編年と栗林式土器を対比させ、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式に細分された（長野県考古学会「シンポジウム弥生文化の東漸とその発展」『長野県考古学会誌』5 1963）。これによると、壺の文様の変化からⅠ式は、縄文を地文とする篋描沈線文が頸部から胴部にわたるものⅡ式は頸部に文様が集中し、胴部に文様のみられないもの、Ⅲ式は翼状口縁をもつ壺とされている。そして栗林Ⅱ式は天王冨外式・百瀬Ⅰ式と平行し、Ⅲ式は海戸・百瀬Ⅱ式と平行する編年案を桐原氏が発表している。

46年（1971）笹沢浩氏は桐原氏の編年案に検討を加え、栗林Ⅰ式に、第2類の篋による太い沈線、縄文地文、頸部から胴部最大径に文様加飾されるもの。第3類の太い沈線と縄文地文、歯状工具による平行線文、半截竹管工具による刺突文（D

字文）に突帯がつくものを当てている。Ⅱ式には縄文地文に篋描文が頸部と胴部に施されるが、胴部上位か、下位の一方の文様を欠く細頸壺と、翼状口縁の壺で、栗林遺跡D地点竪穴と、第3次調査の竪穴出土品をあげている。

それに後続するものとして、文様が頸部のみにみられる細頸壺、翼状口縁が内湾する壺を百瀬式土器として、把握している（笹沢浩「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』Ⅲ 23-12 1971）。

その後、栗林式土器は、長野市周辺に良好な資料に恵まれ、51年（1976）笹沢氏は長野市平栄平遺跡のSKY 05一括出土土器をⅠ式に、SBY 04出土土器をⅡ式に、旭幼稚園遺跡の出土土器を百瀬式平行土器と比定し、土器の文様から集約化、簡略化の傾向をよみとり、千曲川水系の弥生時代中期後半の土器の変遷を提示された。52年、笹沢氏は県内の弥生土器を千曲川と天竜川流域の二大別した編年案を発表された。このうち中期後半の土器は、北信・東信・松本平を同じ土器分布圏にまとめ、栗林Ⅰ→Ⅱ→百瀬式の編年大綱を示された（笹沢浩「弥生土器—中部高地1〜3」『考古学ジャーナル』131・133・134 1977）。

54年、栗林遺跡に西部土地改良区による如地灌漑のパイプが敷設されることになり、遺跡の保護を図るため、遺跡確認緊急発掘調査が行われ、A地区（牧山方面）62、B地区（北原など中心部）110、C地区（栗林集落主要部と西方）70の調査坑（1㎡または半分）を掘って調査した（中野市教委「栗林遺跡確認緊急調査報告書」1980）。

これによると何らかの遺構のみられたのは全体で21箇所、遺物出土調査坑はA地区で23箇所、B地区で70箇所、C地区で23箇所となっており、遺跡の大まかな全体像が把握されている。

第4次発掘調査は、55年（1981）11月、字北原441-9・10の住宅新築に伴い114㎡を発掘調査した。この結果、大小90個のビッドが検出されたが、建物址の規模は復原されていない。遺物は栗林式土器の破片と石鏝、平安時代後期の土師器・須恵器・灰釉の破片と、中世のかわらけ・施釉陶器・

珠洲焼罎鉢・鉄片(釘)・鉄滓・砥石・かなとこ石などで、この遺跡に中世の遺構の存在が確認できた(中野市教委「栗林遺跡第四次発掘調査」[高井]56 1981)。

第5次発掘調査は、字北原484番地に住宅新築のため、約80㎡の面積の発掘調査を56年7月行った。この結果、井戸状遺構が検出され、栗林Ⅱ式から箱清水土器、石鎌・磨製石斧破片が検出され、底部付近から籠状の遺物が検出された(中野市教委「栗林遺跡第五・六次発掘調査」[高井]64 1983)。第6次発掘調査は、前記調査に続いて12月に栗林441-14番地で、同じく住宅新築のため発掘調査を行った。ここは第4次発掘調査を行った位置の西隣で、遺構はピットのみで、出土遺物は第4次調査時と同様な傾向を示し、青磁片・軽石などが新たに出土している(文献同上)。

第8次発掘調査は、栗林482番地の住宅新築工事のため、58年(1983)4月に行った。土器が埋設された土墳墓が検出され、土坑・ピット・焼土などがあつた。遺物は栗林式土器を中心に1600点ほどの破片、打製石鎌・管玉の破片などが検出されている。なお、土墳墓の土器は、栗林Ⅱ式に属する(未報告)。

このころより県下でも大規模の開発が進められ、緊急発掘調査件数が増大し、資料の蓄積も進んできた。この結果、笹沢編年にも検討が加えられるようになった。61年(1986)飯田市恒川遺跡の調査結果から、下伊那の弥生中期後半の編年を北原Ⅰ式→北原Ⅱ式→恒川式とし、榑描文のもつ壺の検討から北原Ⅰ式→天王垣外式→栗林Ⅰ式、北原Ⅱ式→海戸式→百瀬→栗林Ⅱ式の平行関係を認め、千曲川流域の百瀬式存在に、山下誠一氏は疑問を投げかけたのである(飯田市教委「恒川遺跡群」1986)。

同年の隣県3県のシンポジウム「東日本における中期後半の弥生土器」においても設楽博巳・千野浩・小山岳夫氏からも同様な疑問と発言があつた。

小山氏は60年(1985)、61年に行われた、佐久市北西ノ久保遺跡の発掘調査で検出された90棟の

住居址を検討して、北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ式に分類した。そしてこのⅠ・Ⅱ式はほぼ栗林Ⅱ式に平行し、出土土器の時間的流れは、細かく区別できるものでなく、漸進的な様相変化ととらえている。

60年(1985)の長野市松節遺跡の発掘調査で、栗林式の前段階の時期、(伊勢宮式・新諏訪町式段階)の土器が出土し、さらに中期中葉から後半にかけて土器の変遷が明かとなった。

63年(1988)には、53年から10年の歳月をかけて、「長野県史考古資料編(遺構・遺物)」が発刊され、県下の考古資料の集大成が完了した。ここでの栗林式土器の編年は、神村透氏の見解によれば、笹沢氏の見解より一時期下がるものとされている。

栗林Ⅰ式古(弥生Ⅲ期)は、以前に荒山式土器とよばれた土器を指標し、須坂市須坂園芸高校校庭、長野市牟礼バイパス地点遺跡が代表的遺跡である。壺・甕・鉢・瓶・蓋があり、壺は口縁部が小さく開き、頸部の短い細頸で、なで肩の球胴形となり、底部は底径の大きい平底である。文様は頸部から胴部にかけて帯状につけられるものが多い。太い甕描沈線を主文様にして、刺突文・縄文・榑描沈線文・榑描列点文を組み合わせている。

栗林Ⅰ式新(弥生Ⅲ期後半)には壺・甕・鉢・瓶がある。壺は口縁部が立ち上がって受口となったもの、ラッパ状に開く口縁部は水平になって、その内側に文様帯をつくるもの、内側する口縁の3種類がある。いずれも口唇部に縄文をつける。文様は頸部から胴部まで、縄文・甕描沈線文・刺突文・榑描文を組み合わせ、文様構成が複雑で、飾られた土器といえる。とくに口縁部文様帯のあるものにその傾向が強い。素口縁の壺は榑の刺突文と太甕描沈線文に区画された中に、榑描直線文を組み合わせた横帯文となっている。栗林式の特徴である榑描垂下文は、太甕描沈線文の上器にみられ、肩部にU字状に甕描沈線文で区画した中に榑描直線で埋め、弧線の外側に刺突文をつくる。無頸壺は文様をもつものと、無文で赤色塗彩されるものがある。

栗林Ⅱ式土器(弥生Ⅳ期)には壺・注口土器・甕・浅鉢・高坏・蓋がある。

壺の口縁部の形態はⅠ式と同様に二種類ある。器形に変化がみられ、頸部からのなで肩がより強くなり、胴最大径は下半に下がり、無花果形となる。文様は文様帯や施文が簡略化され、縄文・刺突文・櫛描文が無くなるか少なくなり、太篋沈線文が主体となる。垂下文をつけるものでは両側の刺突文が無くなり、垂下文のつかない土器では頸部文様のみとなってくる。無文赤色塗彩の小型壺もある。無頸壺は無文赤色塗彩の蓋つきのものと、口縁部に縄文をつけるものがある。また全体的にみられる「門」字重ね文の壺はこの時期からみられる。

以上のように具体的に当該期の土器の変遷を例示されている。

第9次発掘調査は61年(1986)11月、畑地灌漑のパイプ敷設工事に先立って行われた。これは調査幅30cm、深さ45cmに限定して行い、遺構面の保護を行っている。この時、調査した遺跡の範囲は、宇北原の泉史跡指定範囲を中心に、遺構・遺物の濃密と思われる地点を調査範囲としている。

遺構は小玉石による築石遺構、焼上遺構などで、遺物は栗林Ⅰ・Ⅱ式土器・石鉢石戈破片・石包丁などの石製品が検出されている(中野市教委「栗林Ⅰ・Ⅱ・浜津ヶ池」1988)。

平成3年(1991)12月から翌年にかけて行われた栗林遺跡10次調査は、遺構密集地とみられる北原地縁の西方の道路拡幅改良工事に先立って行われ、栗林期の住居址3を検出し、旧丁曲川岸から小河川に通ずると想定される大溝を調査した。この大溝には多量の土器が埋まっており、6回に分けて取り上げた(中野市教委「栗林遺跡第Ⅳ次発掘調査報告書」1992)。

この4回目から上の土器が先に記した「長野県史」の見解によると、Ⅱ式の範疇にあり、5・6回目の土器はⅠ式に含まれ、赤彩の椀、「門」の字重ね文の先駆的な文様、四束の須和田式との交流を示す土器などが溝底から検出され、松節遺跡段階からの系譜がたどれる文様が見られる。しか

し櫛描文が見られる土器多くあり、櫛描文の登場は、畿内第三様式から南信の北原式の影響下に生まれたものと思われる。

第11次発掘調査は、前年調査地の東方の道路拡幅改良工事に伴い行われた。この調査は遺跡の中核部ということもあって、道路工事で擾乱をうける深さまでの調査であった。この結果、栗林式期の住居址3、遺物集中部12箇所、帯状の礫群1基を検出した。この内、遺物集中部は下層に住居址の存在を予測させる地点もあったと報告されている。遺物は県史の栗林Ⅰ・Ⅱ式の土器で、中には矢印などの記号状の篋描沈線のみられるものがあり、第1次発掘調査時の坪井(1953)氏が指摘した「肩部に6本の弧線文を記号状に入れている」(「下高井」25頁第5図2)との指摘以来の発見であった。

平成7年(1995)開通予定の上信越自動車道中野インターの供用開始と、1998年開催の長野冬季オリンピック開催決定をうけて、周辺道路の整備が急務の課題と浮上してきた。このためアクセス道路として、中野インターから飯山市と山ノ内町方面に通ずる新たな道路の建設が必要となり、この道路が栗林遺跡の範囲に計画された。これらの事業を推進する過程で、中野市教育委員会と、長野県中野建設事務所・長野県道路公社は、長野県教育委員会の指導により、遺跡の保護対策の協議を重ねて来た。そして路線を泉史跡指定地からなるべく離すこと、開発行為の増大で、事業量からみて市教委では、対応できかねるなどの問題があった。この間、協議の結果、調査担当を(財)長野県埋蔵文化センターとし、ここに埋蔵文化財担当の中野市職員を3名、調査員として派遣することで、この問題の決着がはかれた。

平成2年長野県教委は栗林遺跡の周知の遺跡範囲外を試掘調査したところ、従来より遺跡の範囲が拡大し、全路線面積48,000㎡(うち建設事務所分13,500㎡、道路公社分34,500㎡)の発掘調査を平成3・4年度に実施することになった(以下長野県中野建設事務所・長野県道路公社・(財)長野県埋蔵文化センター「県道中野豊野線パイパ

ス志賀中野道埋藏文化財発掘調査報告書・栗林遺跡・七瀬遺跡」1994)。

A区(牧山集落の北西)では弥生時代中期の住居址17棟、上坑4基、円形周溝1基が検出された。住居址は南側に集中する傾向があり、土坑は住居址群内に散在する。住居址の平面形は円形と長方形の二者があり、地床伊が検出できたものと、そうでないものがあり、柱穴の配置はいずれも不明瞭であった。

弥生時代後期の住居址は8棟検出されている。中期の住居址群とは反対の北側の調査区を中心にあり、東の本調査区に広がると予想されている。住居址の平面形は方形である。遺物は箱濠水式土器と古墳時代の東海・北陸系土器が検出されている。

平安時代の住居址は2棟距離をおいて検出され、内1棟(45号)から八稜鏡が検出されている。

B区(牧山集落の西)では弥生時代中期の井戸状の土坑が3基検出された、時期はA区の住居址より新しい。後期の住居址は4棟検出され、いずれも方形で、30号住居址からはガラス小玉が検出されている。さらに古墳時代前期の住居址1棟検出され、平安時代の住居址は5棟検出されている。

C区では遺構・遺物が検出されなかった。

D区(牧山集落の西入口道南北)は昭和40年発掘調査された(林ほか1965)地点を含み、弥生時代中期後半の栗林式期の掘立柱建物址15棟、住居址1棟、井戸状の上坑、墓と考えられる上坑23基が検出され、建物址には1×1、1×2間、1×3間、1×4間などのものがあつた。

E区は県道安源寺～上今井停車場線を挟んだ後背湿地状の所で、平安時代の土師器焼成遺構1基、土坑6基、溝2本が検出されている。

F区はE区の南で後背湿地から高位段丘にかけての地点で、旧石器時代の遺物が高位段丘面から集中して検出された。石器は同じチャート製でナイフ形石器、搔器が各1検出されている。

この地区の縄文時代中期中葉の土器片は僅かな検出である。縄文中期後半の住居址は、高位段丘面上に1棟確認され、その他は住居址の痕跡と思

われる。柱穴や焼土が検出されているので、集落のあつた可能性が強い。出土土器は加賀利E式土器様式第V段階のものと、調査者の中島庄一氏が指摘している。

後期前葉では植物性食料の貯蔵や加工に伴うと考えられる貯蔵穴の遺構があり、住居址・埋甕・配石などが検出されている。貯蔵穴群は高位段丘面から下位の後背湿地に営まれており、7群に細別されている。後期中葉では水さらし場状遺構1基と貯蔵穴が検出されている。縄文後期前葉からの継続利用が考えられる水さらし場状は高位段丘崖の裾の湧水と、その流れを利用し、谷を掘り込んで、木枠を埋め込み、底部と側面に板材を隙間なく組んだものである。

平安時代では高位段丘面と後背湿地の間のテラス状の平坦面に、住居址5棟、溝5基、土師器焼成遺構2基、上坑5基が検出されている。土師器はロクロを利用して作られた甕や坏である。中世の遺構は平安時代と同じ立地で、土坑3基、溝7本が検出されている。遺物は中世土師皿や珠洲焼の甕、青磁碗が検出されている。以上が今回の中野市教育委員会による、第12次栗林遺跡発掘調査までの学史の概要である。

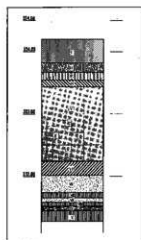


図5 土層模式図

第4節 層序

この2年度にわたる発掘調査のうち、D地点を除いて、家屋、畑地灌漑、道路(U字溝)などの構造物があり、擾乱を受けた箇所が多かった。D地点でもブドウ棚の吊線アンカーの穴で当間隔に擾乱を受けていた。このD地点Iの土器集中地点南壁の断面を観察すると、標高332.62m、I表土(耕作土・擾乱層)13cm、II茶褐色土(粘質土)10cm、III暗茶褐色土(粘質土)8cm、IV黒褐色土(粘質土)17cm(多遺物包含層)、V黄黒褐色土(粘質土)10cm(少遺物包含層)VI黄色土(強粘質土、厚さ不明)となっている。

B地点は宅地跡のため、良好な模式位置はない。Cグリット北の道路(標高333.8m)に面した所を観察した。コンクリート厚さ7cm、I・II茶褐色土暗茶褐色土22cm、III黒色土(粘質土)15cm多遺物包含層、IV茶黒褐色土(粘質土)6cm少遺物包含層、V黄褐色土(粘質土)厚さ不明、となっている。

さらにこの下層はB・C3の井戸址による観察で、標高334.6mから、V黄褐色土1.2m、VI茶褐色砂層12cm、VII乳白色粘土層15cm、VIII茶褐色砂層32cm、IX乳白色砂層8cm、X茶褐色砂層8cm以下不明となっており、VI層以下が砂などの堆積層が明瞭である。

C地点の西側の道路に面した中央部の土層断面は、標高333.7mで、I茶褐色土37cm、III茶黒褐色土15cm(遺物包含層)、IV黄褐色土10cmであり、以下の地層は井戸で観察された地層に移行するものと推定され、第3号上坑の下層からも同様な地層が観察された。

○柴林遺跡土層観察表

- I 茶褐色土 耕作土またはそれに準じるもの
- II 暗茶褐色土 耕作擾乱層の下層
- III 黒色土(粘質土) 多くの遺物が含まれる層
- IV 茶黒褐色土(〃) 僅かの遺物が含まれる層

- V 黄褐色土(強粘質土) 約1万年以上経過したと思われる地層
 - VI 茶褐色砂層 鉄分の含んだ砂、河岸堆積層
 - VII 乳白色粘土層 河岸堆積層
 - VIII 茶褐色砂層 (〃)
 - IX 乳白色粘土層 (〃)
 - X 茶褐色砂層 (〃)
- 地表より2.5mまで調査、以下不明。

第Ⅱ章 遺構と遺物

先に調査口誌に記した、発掘調査該地点の内、旧千曲川よりの県道東側のE・F地点は遺構・遺物が検出されず、報告より除外してある。D地点は県道安源寺〜上今井停車場線と、牧山〜栗林の交差点から西方に入った道路拡幅の地点で、南側に平行して、調査幅最大2.2mである。これを西からD1・D2・D3グリットに分けて調査した。

県道拡幅工事に伴う調査では、交差点東南部が該当地で、移転家屋が2戸あり、平成6年度はその中間の畑を発掘調査しA地点とした。7年度は家屋の移転完了後に発掘調査を行い、交差点寄りの神田氏宅跡をB地点、南の松島氏宅跡をC地点とした。この3地点を県道側から2mグリットA・B・C・Dとし、北から1〜16通りのグリットを設定して調査した。

第1節 縄文時代

今回の調査では縄文時代の遺構は確認されず、遺物が散在して発見されただけである。

1 遺物

《土器》

検出された縄文時代の土器片は、C地点の12グリット（以下グリット略）第3号土坑（10図2）と、C13第6号土坑（同図4）の覆土から検出したもので、当市に類例の多い、中期の北陸地方と文化交流を示す土器片と推定される。

《石器》

石器 D地点D1の弥生時代土器集中地点の中から一括で検出されたもので、黒色緻密な安山岩製で、つまみに対する刃部が正三角形でなく、一方に偏っている。正三角形のものより後出的な形態である。前期後半の所産かと思われる（9図1）

打製石斧 A地点の第I層から検出されたもので、耕作中?についた新しい瑕がある。安山岩製で刃部には摩耗した使用痕がある。主に片面を加工して製作され、着柄のためか、頭部にくびれがある。中期後半期に多い形態をしている（同図3）

打製石斧 D地点の中央付近から検出されたもので、安山岩製で、頭部の破片かと推定される（同図2）。

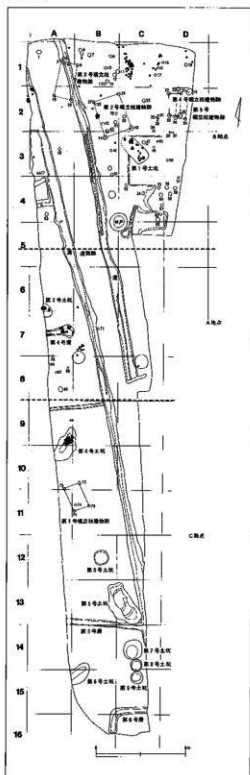


図6 調査地点の遺構配置 (1)

第2節 弥生時代

1 遺構

〈上坑〉

第1号土坑(横)(B地点SK1) C3にあり、主軸を北西に向け長軸推定2.9m、短径1.4m、検出面からの深さ15cmを測る。この長軸の北端に赤彩の胴部注口壺(15図5)口縁を内部に向けて倒れていた。その他甕口縁部破片(8図21)、壺破片(同図23)など栗林Ⅱ式に属する土器片が埋納または覆土中にあり、幕墳としての性格が強いと思われる(10図1)。

第2号土坑(A地点SK2) 中央北よりの西、A6・7間に検出されたもので、主要部は調査地外にあって、規模は不明である。西壁面で幅1.2m測り、調査地外に傾斜して深くなっている。覆土は壁面で50cmを測り、Ⅳ層茶黒褐色土は、栗林式土器片を含み、下層は黄褐色土に黒色土がブロック状にあり、粘土採掘坑の可能性ある(10図2)。

第3号土坑(C地点SK3) B12にあり、ほぼ円形を呈する土坑で、直径1.2m、深さ55cmのやや中央の凹んだ形状を呈する。埋没土の1層の茶褐色土17cmは堅く締まって、土器片は少なかったが、縄文中期土器片1(8図1)が検出された。Ⅱ層の暗茶褐色土とⅢ層の黒色土は軟らかく、土器片が多量に埋まっていた。この中には焼土塊・炭・少量の炭化粉などがあり、土器片のうち、復原できたのは壺(15図1)・壺(同2)・甕(同7)などで、加熱した破片もあり、組み合わせて復原してある。その他拓影図(8図5・7・15・17・26-33)などの土器片があった。またこの下層、Ⅵ層は茶褐色砂層であった(10図3)。

第4号土坑(C地点SK4) A9・10にあり、主軸を北東に向けた不整の長楕円形の土坑で、規模は長軸3.3m、短軸1.65m、深さ1.1mの規模でⅣ層の茶褐色土が埋没し、小形梨形土器(15図8)や栗林式の上器片が数片検出されたが、摩滅が激しく時期は確定できなかった。調査時の所見では粘土採掘坑と認定した(10図4)。

第5号土坑(C地点SK5) C12にあり、主軸

を北西に向けた、不整の長楕円形の土坑で、長径約4m、短径2.15m、深さ1mの土坑で、この埋没土からは栗林式と推定される土器片が1片だけ検出されている。埋没土層の観察から粘土採掘坑の可能性ある(10図5)。

第6号土坑(横)(C地点SK6) B15にあり、主軸を北東に向けた長楕円形の土坑で、用地外に一部かき完掘されていない。検出の長径2m(推定長さ3m)、短径1.3m、深さ1mの土坑で、埋

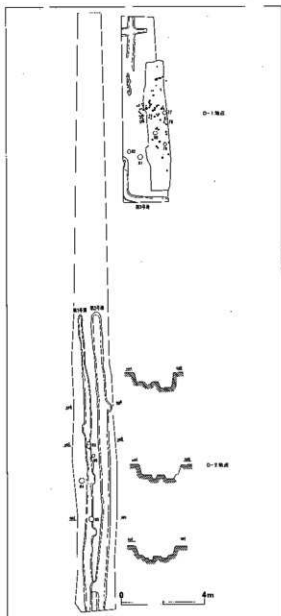


図7 調査地点の遺構配置(2)

没土から弥生式土器片1と、縄文中期土器片1（8図2）が検出された。これも粘土採掘坑の可能性もある（10図6）。

〔柱穴〕

D地点 西方のD1の土器片集中地点の下より、溝などととも6基検出されている。直線方向性が認められるが、遺構としての組み立ては、調査面積の限界もあり、不可能である。

B地点 弥生時代と近世後期と推定される建物の柱穴が混在していて、判読は困難である。隣接地の埋蔵文化財センター調査地の調査成果などから1間×1間の掘立柱の建物址の存在を拾うと、（12図2～5）の組み合わせが可能である。また

P27・24・23・31・32・48・49・44の柱穴のように円を描くものもあるが、その間に土坑SK1と現代の溝があって明確さを欠いている。

C地点 弥生時代と推定される柱穴は、SK4の南側A・B10・11にある柱穴で、1間×1間の長方形の掘立柱建物址である（12図1）。

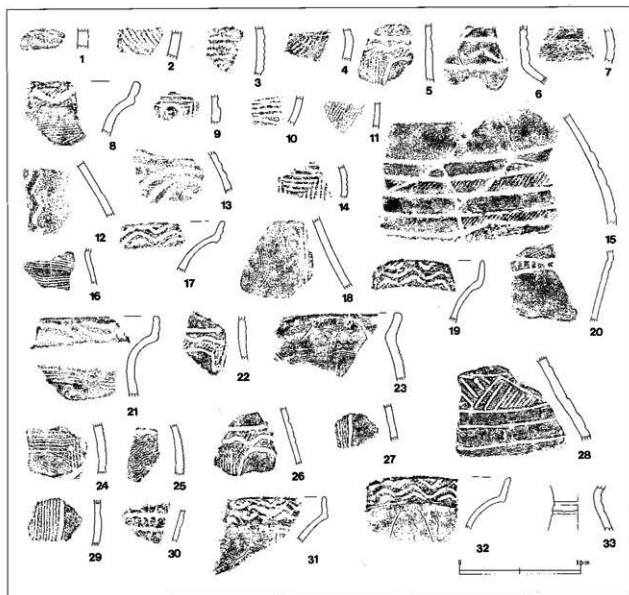


図8 土器拓影圖

付表1 土器観察表(8図)

図番付	出土位置	器種 (推定)	部位 (推定)	手法の特徴		文様	胎土・焼成	色調		備考
				外面	内面			外面	内面	
8図1	CB-12SK	深鉢	—			竹管文	砂粒多い軟	暗赤褐色	暗赤褐色	縄文中期土器
2	CB-14SK	〃				縄文	〃	暗黄褐色	暗黄褐色	〃
3	BD-1	〃				〃	繊維痕	黄褐色	暗褐色	
4	CB-12	〃			ヘラミガキ	縄文・沈線	やや軟	〃	〃	—
5	CB-12SK	壺	胴部上	〃		縄文・沈線・櫛描文	〃	赤彩	赤褐色	弥生土器
6	D-1-2	〃	〃	〃		縄文・沈線	〃	暗褐色	暗褐色	〃
7	CB-12SK	〃	〃	〃		縄文・細沈線	〃	〃	〃	〃
8	BA-5	〃	口縁部	〃		沈線・縄文・櫛描文	〃	〃	赤褐色	〃
9	D-3	甕	胴部	〃		7川の重ね・沈線	砂粒少	暗黄色	黒褐色	〃
10	〃	〃	〃	〃		沈線	やや軟	〃	〃	〃
11	〃	〃	〃	〃		太い櫛描文	堅	黒色	黒色	〃
12	D-1	壺	胴部上	ヘラミガキ		沈線・櫛描文	石英粒	赤褐色	赤褐色	〃
13	〃	〃	〃	〃		太い沈線	器面剥落	黄褐色	黄褐色	〃
14	〃	甕	〃下	〃		沈線	堅	黒色	黒色	〃
15	CB-12SK	壺	胴部上	—		縄文・沈線	砂粒・軟	黄褐色	黄褐色	〃
16	D-1	甕	〃	ヘラミガキ		櫛描文	堅	暗褐色	〃	〃
17	CB-12SK	壺	口縁部	〃		縄文・沈線	砂粒少・軟	黄褐色	黄褐色	〃
18	〃	〃	胴部上	〃		沈線・櫛描文	〃	〃	〃	〃
19	〃	〃	口縁部	〃		沈線・縄文	〃	〃	〃	〃
20	〃	〃	胴部下	〃		縄文・沈線・刺突文	砂粒多軟	暗褐色	〃	〃
21	D-1	〃	口縁部	〃		沈線・櫛描文	〃	黄褐色	黄褐色	〃
22	CB-12SK	〃	胴部上	〃		縄文・沈線	〃	暗褐色	暗褐色	〃
23	BC-3 SK	甕	口縁部	〃		細櫛描文	砂粒少・堅	赤褐色	暗褐色	〃 2次火熱
24	〃	〃	胴部上	〃		櫛描文	〃	暗褐色	〃	〃
25	BA-5	甕	胴部中	〃		櫛描文	〃	〃	〃	〃
26	CB-12SK	壺	胴部上	〃		縄文・櫛描文・沈線	砂粒少・軟	赤褐色	黄褐色	〃
27	〃	〃	〃	—		沈線・櫛描文	〃	赤褐色・黒色	黄褐色	〃
28	BC-1	〃	〃	—		〃	砂粒少・堅	暗褐色	暗褐色	〃
29	CB12-SK	〃	〃	—		〃	〃	赤褐色	〃	〃
30	〃	〃	〃	—		沈線・刺突文	砂粒少・軟	黄褐色	黄褐色	〃
31	〃	〃	口縁部	—		沈線・—	〃	〃	〃	〃
32	〃	〃	〃	—		沈線・縄文	〃	青灰色	青灰色	〃
33	〃	〃	頸部	—		沈線	〃	赤褐色	赤褐色	〃 2次火熱

〈溝〉

D地点 D地点D2からは平行する溝が2条検出されている。第1号溝(北)は幅が10数cm～40cmで、深さは20cmほどである。第2号溝は幅が50cmで、深さは20cm～60cmで、西に僅か傾斜していた。この中央部に柱穴が4基あり、遺構はV層黄褐色土中であり、西側に竈柱があって、発掘調査が不可能の部分があった。その西では溝が一つになり、南北に直交する溝もあり、その西ではIV層茶黒褐色土層のため、判別できなかった。また、遺物が無検出で平安時代まで下る遺構かもしれない(7図D2)。

第3号溝はD1の弥生式土器集中地点の西側の下層にあって、L形に曲がり、幅30cm、深さ20cmを測る(7図D1)。

A地点 第4号溝はA7に東西方向にあり、第3号土坑と並んでいる。最大幅77cm、最小幅40cm、深さ30cmを測り、埋没土はIV層茶褐色土で、栗林式土器片を包含し、上層にロクロ製の甕破片(15図10)が展開していた。規模は西の調査地外に延びて不明である。時期は栗林式期と推定される(11図1)。

C地点 第5号溝はC地点のB13～C13・14の東西方向にあり、東は第7号土坑に接し、近代の道路の溝で切られている。幅45cm、深さ10cmを測る(11図2)。

第6号溝はC地点の南端にあって、L状を呈している。幅60cm深さ12cmを測る。方形形跡の一部分の可能性の余地も残されている。以上の2例の遺構は土層の状態から、栗林式期のものと推定される(11図4・3)。

2 遺物

〈土器〉

今回調査した各地点の大まかな弥生式土器の時期別の出土傾向を記すと、D地点1の上器集中地点では、栗林Ⅱ式の土器と、少量の箱清水式土器が混在し、移動した痕跡のあるものだった。B地点では、栗林Ⅱ式土器がほとんどで、6号土坑出土土器も栗林Ⅱ式土器であった。

A地点も当該期は同様で、C地点では第3号土坑出土土器が注目される。以下、この二つの土坑出土土器について検討する。

〈第3号土坑出土土器〉 土坑内のI層茶褐色上には少量の栗林Ⅱ式段階の上器が11片含まれ、以下のⅡ・Ⅲ層に縄文中期土器片1、ほぼ器形の判明する弥生中期土器蓋2(15図1・2)、甕1(同図7)のほか、甕破片40片(底4個体)、甕破片20片(底4個体)、赤彩鉢1片、注口土器1片、焼土塊7片、黒色緻密な安山岩割片1、炭・炭化初・石包丁などがあつた。このようにこの二つの層の上器片は、2次の火熱によって、赤く焼け器面が荒れている土器がほとんどあつた。

細口壺(15図2)は2次火熱の上器片と、非火熱の土器片を接合して復原したもので、口縁部は欠失している。頸部に3条の篋描沈線をめぐらせ、胴部に単節のLR縄文を施し、平行する3条の篋描沈線と、下部に3条の篋描沈線を5単位の波状

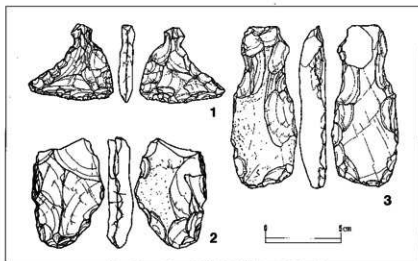


図9 石器実測図

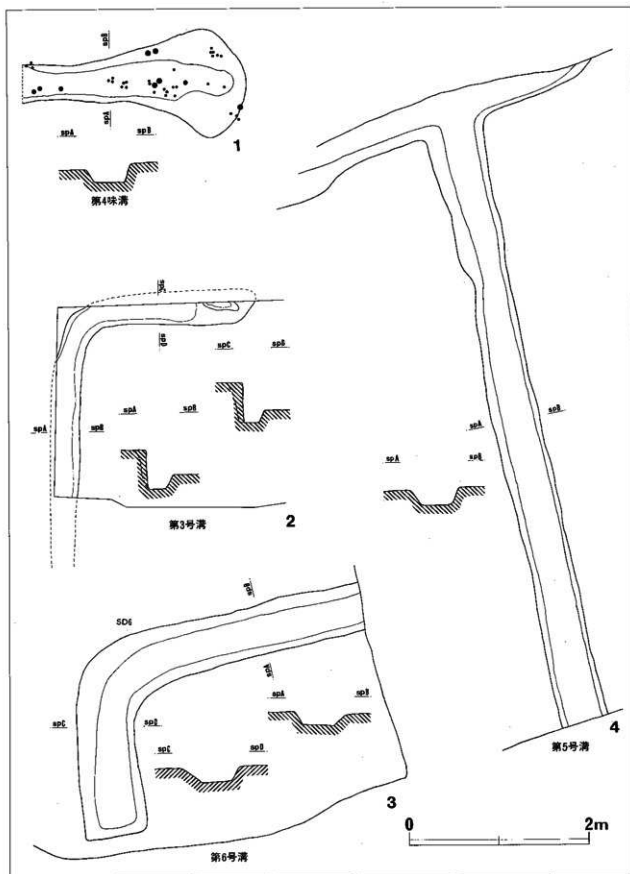


图10 土壤实测图

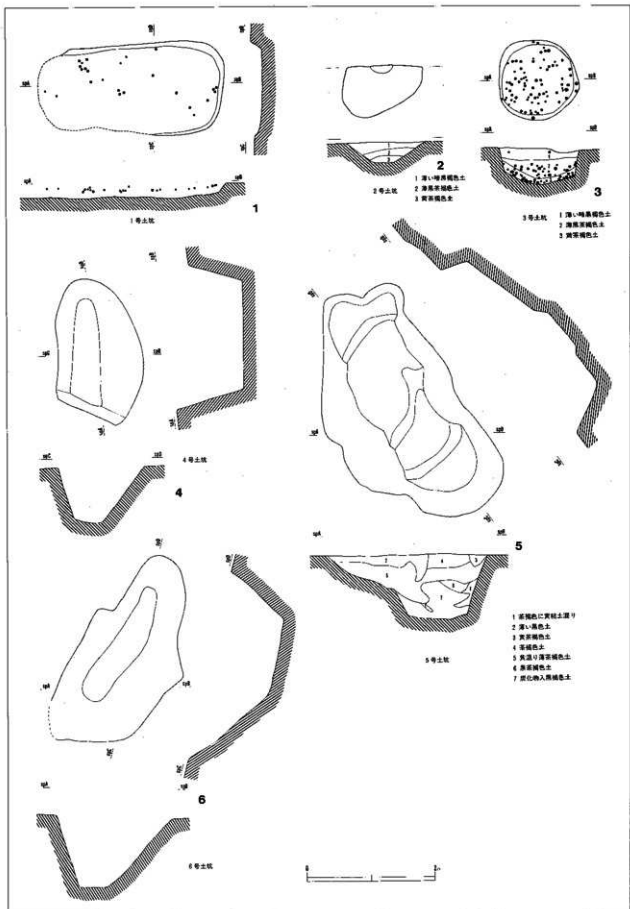


图11 清址实测图

に配し、縄文を磨消している。この地方の弥生中期の壺型土器は、前段階の長野市松節遺跡出土の土器は、胴部最大径が胴上部にあり、栗林Ⅰ式古段階では中半にあり、以降は下に下がる傾向が指摘されている。栗林Ⅱ式段階は文様の簡略化の傾向にあるので、この土器は、栗林Ⅰ式新段階の所産と考えたい。

広口壺（15図1）L縁部が失われているが、短く直立した段状の口縁をもつものと推定され、頸部に2状の匏描波状文をめぐらし、胴部上は長いU字条の匏描沈線を12単位連続させ、中に横描沈線を縦に充填している。その下の2条の匏描沈線

の間には、1条の波状匏描沈線をめぐらせ、下部に匏描沈線の4条の菱形文を8単位横に連続させ、菱形文の上部にボタン状貼付けを8単位付加させている。

先の土器でみた器形の傾向からみると、さらに胴部最大径が下降している。

甕（15図7）は2次火熱のため、脆弱な土器で上半部に赤彩が残っている。口縁部下に稜を作ってくびれている。

以上の3点の土器は、3号土坑一括出土土器として、層的にみても資料操作上で誤りのないものと思われる。栗林式土器も今後資料の増加と、

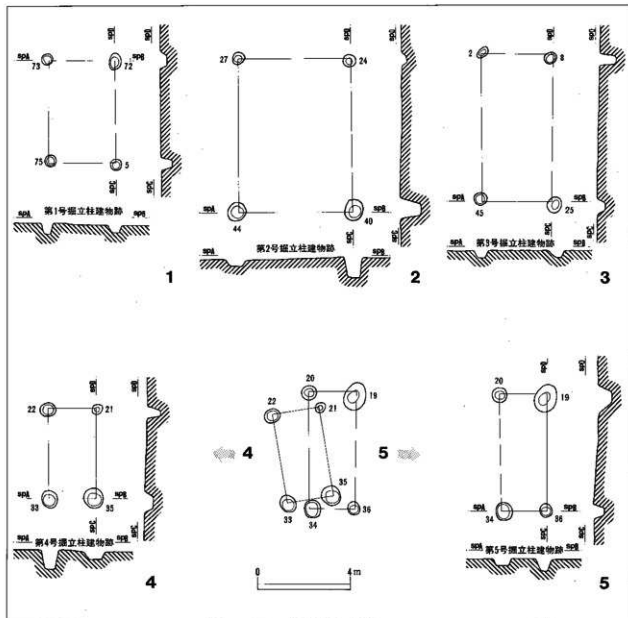


図12 獨立柱柱穴実測図

穴位番号	穴名	透骨針 番号	図	穴位番号	穴名	透骨針 番号	図	穴位番号	穴名	透骨針 番号	図
1	A-1			17	C-1			33	D-2	4	
2	A-1	3		18	D-1			34	D-2	5	
3				19	D-2	5		35	D-2	4	
4	A-1			20	D-2	5		36	D-2	5	
5	B-1			21	D-2	4		37	D-1		
6	B-1			22	D-2	4		38	D-1		
7	B-1			23	C-2			39	C-2		
8	B-1	3		24	B-2	2		40	C-2	2	
9	B-1			25	A-2	3		41	B-2		
10	B-1			26	B-2	2		42	B-2		
11	B-1			27				43	B-1		
12	B-1			28	B-2			44	B-2	1	
13				29	C-2						
14	B-1			30	C-2						
15	C-1			31	C-2						
16	C-1										

图13 柱穴实测图(1)

穴位番号	FFH	透視図 番号	図	穴位番号	FFH	透視図 番号	図	穴位番号	FFH	透視図 番号	図
45	A-2	3		38	D-4			72	B-10	1	
46	B-3			39	D-4			73	A-10	1	
47	C-3			40	C-4			74	B-11		
48	C-3			41	C-4			75	B-11	1	
49	C-3			42	C-4			76	B-11	1	
50	D-2			43	C-4			77	D-1		
51	B-3			44	A-3			78	D-1		
52	A-2			45	A-4			79	D-1		
53	C-4			46	A-3			80	D-1		
54	C-4			47	A-3			81	D-1		
55	C-4			48	A-3			82	D-1		
56	D-4			49	A-3			83	D-2		
57	D-4			50	A-5			84	D-2		
				51	A-6			85	D-2		
				52	B-7			86	D-2		

图14 柱穴実測図(2)

研究の深化によって形式が細分化されると思われるが、今はI式段階の新しい時期に該当せしめたい。

〈第1号土坑（墳）出土土器〉 この土坑からは北辺に位置した壺のほか、壺破片8、甕破片12が検出された。しかしこれらの破片は摩滅したも

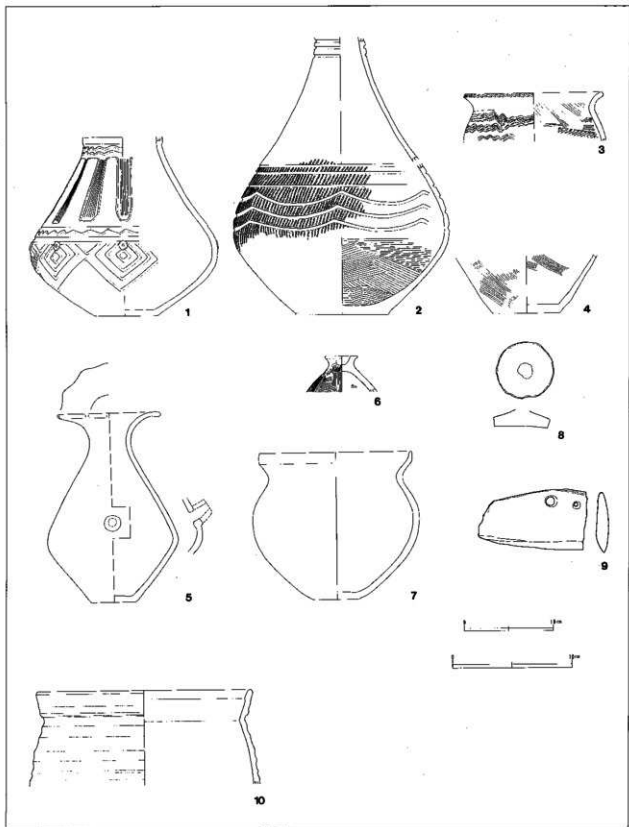


図15 土器・石器実測図

のが多かった。

壺(15図5)は外面が赤彩され、朝顔の花弁に似た14単位の口縁をもち、ラップ形に開いている。長頸壺で胴部最大径は下半部にあり、その上に注口が付けられている。これは従来からの粟林Ⅱ式土器の範疇に属する土器で、赤彩、口縁部の加飾、注口など祭器的色彩のつよい土器で、土坑(墳)

に埋納されるにふさわしい土器と思われる。

《石器》

石包丁 第3号坑出土白灰色に斑点のある安山岩質の石を加丁した石包丁で、大小の2孔が両側に穿孔されている。刃部は片刃で孔に対する刃部は厚減が認められる。形式は後出的で、復元すると全長14.5cmの大きさと推定される。

表2 土器・石器観察表(15図)

図番	出土位置	器種 (推定)	部位 (推定)	手法の特徴		文様	胎土・焼成	色調		備考
				外面	内面			外面	内面	
15図1	CB-12SK	壺		—	—	沈線・櫛歯文	砂粒少	白青灰色	白青灰色	弥生時代 多田I集計, 2次火焼
2	〃	〃		ヘラ成型	ハケ成型	沈線・縄文	砂粒中	暗褐色	赤褐色	〃
3	D-1	甕	口縁部	〃	〃	縄文・櫛歯文	砂粒少・堅	暗黄褐色	暗褐色	〃
4	CC-14P1	〃	底部	〃	ヘラ成型	—	砂粒多	赤褐色	黄褐色	〃
5	BC-3SK	壺		赤彩ヘラ置き	ハケ成型	—	砂粒細	暗赤色	黄褐色	〃 胴部注口
6	BD-4P1	甕	底部	ヘラ成型	ヘラ成型	—	砂粒少・堅	黒褐色	黒褐色	〃
7	CB-12SK	〃		赤彩	〃ミガキ	—	〃	暗褐色	暗褐色	〃
8	CA-9SK	蓋		ヘラ	—	—	砂粒少・赤褐色	—	—	〃
9	CB-12SK	石包丁		磨製・2孔	—	—	白灰色	安山岩系	—	〃
10	AA-7SD7	甕	口縁部	ロクロ成型	ロクロ成型	—	石英粒・堅	赤褐色	赤褐色	平安時代

第3節 平安時代

1 遺物

今回の調査では平安時代に属すると思われる遺構は検出されていない。

〈土器〉 検出された平安時代の土器で器形の判明するのは、A地点の弥生時代の第4号溝の上

層に展開していた甕(15図10)で、巻き上げ、ロクロ成型され、口縁部のくびれはゆるやかなカーブを描き、胴部の膨らみも少ないと推定される。平安時代V期(国分期)に比定される土器である。

第4節 近世

1 遺構

今回の調査では、中世から近世前期の遺構は検出されていない。

〈井戸と柱穴〉 井戸SE1は、B地点の南中央B・C4・5に検出された。Ⅱ層暗茶褐色土が円周にあり、Ⅰ層茶褐色土が埋まり、Ⅲ層黒褐色土の下に、大が長さ30cm弱の河原石を初め、大小30個

の石があり、中には凹石などもあった(17図11・10)。瓦質の小形火鉢(17図1)・茶碗(同図3~4)が石の間に埋まっていた。この面から水分の多いシルト層で、なかに小石・木片・小枝片・板片・篠竹片・竹細工の時、剥いだ表皮(ハギリ)などがあり、底から55cm以上に上部が細く腐朽した、長さ1.5m、最大径12.2cmの鋸で切られた、杉材と

推定される六角に加工された木材など植物性遺物が埋まっていた。

底部近くには木片のほか、茶碗(17図2)・縁起物の俵を背負った牛の小さな土製品(同図7)などが出土した。

この井戸の断面は深鉢形で、確認面の直径1.55m、中辺で1m、底部で0.9mを測り、底部は僅か傾斜し、下層のX層砂質土から滲出する地下水を利用したものと思われる。

近世の生活雑器の出土した、この井戸に関連する近世の住居址は、この付近に存在が推定される。しかしこの遺構の存在が予想される上層の黒土層は、発掘調査の折、重機で除去されることが多く、さらに後世の住宅工事などにより、擾乱をうけており、復元を困難にしている。

B地点で検出された柱穴のうち、近世と推定したものは、基準尺を1尺=30cmとしてD2を中心としたグループと、D1とC1を中心としたグループが、この基準尺に適合する。したがってこの方面に建物址が想定されるが復元は困難である。

2 遺物

〈陶磁器〉 茶碗1(17図4) 陶器で素地は灰色をしている。貝須手で、内外全面に貝入がある。口縁下に圈線が2条あり、胴部下の圈線の間には貝須(染付)で描かれた雲文・草花文があり、砂高台の転換点に圈線がある。

茶碗2(17図2・3) 磁器で2個体検出されている。素地は白色を呈している。器形は半筒形で、砂高台は小ぶりで、底部は比較的厚い。珪石釉で白色に青みがかったところがあり、釉が流れて圈線が消えている。淡い貝須による押捺(スタンプ)で、羽根を広げた鶴と松が間隔をおいてみられる。圈線は胴部下と、高台に1条ずつ巡らされている。

この2種の茶碗は日用雑器の部類である。信州には江戸中期から明治にかけて30有余の陶磁器の窯が築かれ、地域の需要に応じて生産していた。この時期、高井地方で知られた窯は、弘化2年(1845)須坂藩窯として開窯(磁器)した須坂古向窯で、これは美術品を上とした製品を焼き、後

に数年間、雑器も焼いたようである。また創業が安政5~6年(1858~9)頃と推定されている藤沢焼(上高井郡高山村教委『藤沢窯跡』1985)は、同村の三沢山から陶石を採掘し、白粘土は山田温泉下の松川の段丘から採取している。そして、窯跡の焼土の広がりなどから5~6年間の創業とみられている。しかしこの製品と比較してみると、今回の2種の茶碗とは作品が異なっている。

したがってこれらの窯の製品の可能性は少なく、茶碗1は文化13年(1816)に始まる松代焼(長野市松代)に類似しているとみられるが、同系といわれる洗馬焼(塩尻山)などもあり、今後の考究を待ちたい。

〈土器〉

手あぶり形火鉢(17図1) 瓦質土器である。胎土は高丘陵に産する粘土と、同質と観察される。底部は失われて明らかでないが、平底と推定される。ロクロ成型または回転台使用で作られ、口縁部は半縁で幅2cmを測り、口縁下のくびれは垂直に3cmあり、下に雷文が連続して押捺されている。その下の圈線の間は珠文を当間隔に押捺している。胴部最大径に圈線があり、この間は無文帯となっている。胴下部から底部までは、「く」の字状(反対の「く」もある)の敲打痕が横列に連続し、5列ほど巡り、文様化している。

この敲打痕の観察から、幅1cm前後の木目の痕跡とみられる。

牛の土製品(17図7) 高さ3cm、幅2.2cmの

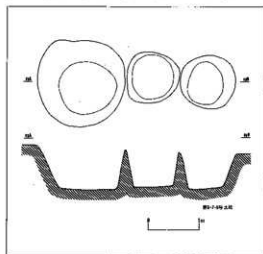


図16 井戸址実測図

小さな土像である。胎土に細かな雲母がみられ、黄褐色を呈し、長径の中心で合わせた、合わせ木形で作られている。周囲に三角の沈刻のある台に載り、前足と後足はそれぞれ分離していない。小ぶりだが、肥えた牛の背中の鞍には、横に3筋、縦に1筋の縄をかけた初(米)俵を左右に背負っており、首には力棒の表現が見られ、尻尾の毛は長くたれている。

後足の中心に台から貫いて長さ1.9cm、直径0.35cmの穿孔があり、用途として考えると、乾燥のためと、お札その他の縁起ものを付けた棒の先に挿すなどの目的が想定される。また、この土像は他の木彫などの大きなモデルがあって、製作されたものと推測できる。

この土像は一種の縁起もので、牛は勤勉、俵は豊年を現し、真面目で豊かな暮らしができる願いが込められている。近世には縁起をかつぎ、縁起がよい(わるい)が、商家・芸人・花柳界などを中心に民間信仰が都市から地方の庶民にひろがり、社寺参拝や、縁口に玩具によく似た呪物を売ることが盛んとなった。これを文書類とは別に「縁起もの」と呼ばれている。

近世後期におけるこの地方の民間信仰の一端をうかがわせる遺物である。

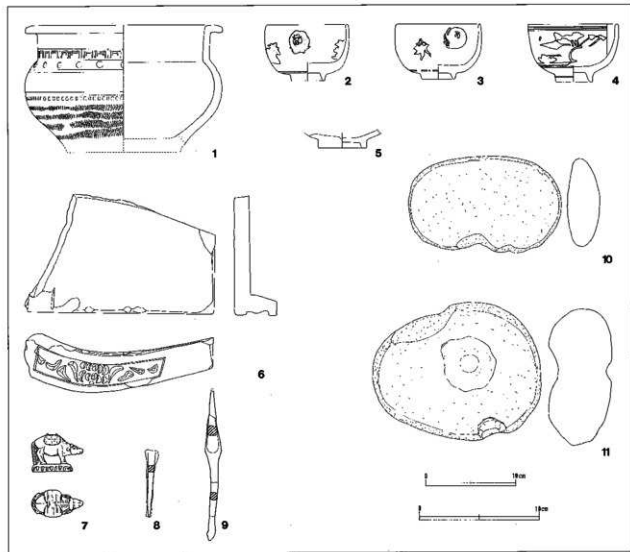


図17 近・現代遺物実測図

付表2 出土遺物観察表(17図)

図版番号	出土位置	器種	部位	手法上の特徴		文様	胎上	色調		備考
				外面	内面			外面	内面	
17図1	BC-井戸	火鉢		ロクロナデ	ロクロナデ	雷文・珠文・割突文	砂粒無	黒褐色	黒褐色	近世・瓦質土器
2	〃	碗		染付	輪索	鶴・松		白灰色	白灰色	近世陶磁器
3	〃	〃		〃	〃	〃		〃	〃	〃
4	〃	〃		〃	〃	草花文		染付	灰白色	買入あり
5	D-1	〃	底部	輪索・扁台	貫入			青白色	白灰色	中世・青白磁
6	AC-7SD	軒先瓦		圧痕・ナデ	圧痕・ナデ	菊花文		黒褐色	黒褐色	現代・瓦
7	BC-井戸	縁起物		型押し		猿を背負った牛	砂濃無し	黄褐色		近世
8	〃	鉄釘		鍛造品				鉄さび色		〃
9	〃	職?		〃				〃		近世木柄痕跡あり
10	〃	鎌石?						暗褐色		近世以降
11	〃	凹石		両面に凹み				暗灰色		弥生時代以降、安山岩

第5節 現 代

現代の遺構は近世から改修を受けながら連続する道路と側溝、肥え溜の円形土坑が検出されている。

1 遺 構

〈道路と溝〉(3図)(6図) 1993年A地点の調査で、中央部の南北方向に道路跡が検出された。北側で2.3m、東側の溝が幅95cm、西側は幅80cmで深さは15~30cmである。道路面は堅くV層黄褐色で、敷砂礫が僅か残っていた。溝はⅡ層暗茶褐色土で、中に道に敷かれていた砂礫・瓦の破片(17図6)・にぎり鉄などが検出された。

1994年のB地点の調査では、西北の現交差点側に寄って、道跡が検出された。この部分では道幅3m、溝幅は左右60cm、深さ30cmである。神田家の家屋建設によって攪乱された所もあったが、前年調査した道の跡に接続することが確認された。

C地点の調査では、道跡は東にそして西側の溝と、道の一部が検出され、これは中辺で調査地外にそれぞれいた。

このように調査地全体を見てみると、調査地B地点の北方では、現県道と重なり、南方では湿地帯と、稲作用の溜池があって、東に曲がっている

ことが推測される。この道が廃絶し、現県道が開設されたのは、大正末年から昭和初年といわれている(地元の増田恒良氏の話)。そして道が移動の結果、石敷は除去されて畑となり、さらに宅地となったことと思われる。

〈肥え溜〉(18図) C地点C14・15グリットに表土を剥いだ段階で、円形の落ち込みが現れた。北から第7号土坑は直径1.75cm、深さ80cm、第8号土坑直径1m、深さ65cm、第9号直径1.1m、深さ1.15cmの規模で、黄色粘土、砂利などが埋まっていた。遺物は瓦片の他検出されず、底に有機物が少量見られた。これは隣接して設けられていることなどから、人糞尿または畜糞などを熟成する野溜の類と判断された。

2 遺 物

〈瓦〉(17図6)はA地点の溝から検出され、ほかに、にぎり鉄などが道の溝から検出された。瓦は軒先瓦の破片である。土色は灰色で、面は暗灰色を呈し、堅緻である。器面の研磨材として銀粉状のものが付着している。表面は特に艶磨きされ、軒先の文様の見られる部分の内外面同様である。軒先の面の中央を中心として、木型によって

菊花文と推定される文様を押捺されている。

この瓦は調査地点の北にお住まいの小林理平氏の先代が、草間（中野市）から住まいを移して、ここの粘土（黄色土）を使って瓦を焼いたと言われている。小林氏の西隣のF地点の試掘で、瓦焼成窯の跡が検出されている。この小林氏の瓦製造の創業期間は、明治中期（1890年代）から昭和27年（1952）ごろまでと推定されている。

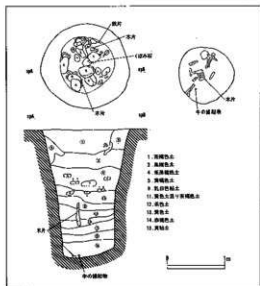


図18 肥え溜り遺跡調査図

第Ⅲ章 まとめ

栗林遺跡は千曲川の自然堤防上に営まれた遺跡で、南方の河岸段丘上には、旧石器時代の遺構がみられ、縄文時代も前期からの遺構が、僅かながら検出されている。今回も中期の土器が僅かに検出され、北陸地方との交流を示す土器がある。後半は在地の土器から次第に関東系の加曽利E式の傘下に組み込まれたと思われる。勿論その間に各地との交流の見られる土器がある。

後期は前半の土器まで出上が見られ、以降、弥生時代までの遺構・遺物はみられない。弥生時代は前期から中期前半までの遺構・遺物は、現時点では検出されず、栗林式土器はⅠ式古・Ⅰ式新・Ⅱ式に分類されている。将来は細分される可能性を秘めているが、Ⅰ式古段階では各地からの交流の土器がみられ、栗林式の土器様式が独自に確立するのは、Ⅰ式新段階と推定され、この段階からこの地方でも遺跡数が増大し、周辺各県に影響を及ぼす。

今回の調査で検出した、この時期の第3号土坑で検出した土器は、一括廃棄土器として注目され、この種の土坑が、なんの目的をもって作られたか、焼かれた土器の存在がなにを示唆するものか、今後の類例の増加を待ってさらに検討したい。

このⅠ式からⅡ式の段階の遺跡は、字北原の泉史跡指定範囲と、その周辺に広範囲にわたり、牧山集落の西方、「長野県埋蔵文化センター」の調査した地点にも住居址群があり、今回の調査地はその中間地帯にあたり、B地点の掘立柱建物址？など、栗林遺跡群の集落構造の究明に、何らかの寄与したものと思われる。

弥生後期の箱清水式の遺構も地点を変えて点在し、継続性を示している。しかし大勢は千曲川の広い後背湿地(延徳田圃)を望む、安源寺遺跡に繁栄を奪われるようである。

古墳時代の遺物は僅かで、遺跡に広範に散在してみられるのは、平安時代後期の遺構・遺物である。この遺構も千曲川の洪水によって、深く埋没しているのが実状である。

中世では輸入陶磁器や、掘立柱住居址の柱穴など検出されているが、具体的にない。そして集落は牧山の北方(古牧)と、栗林の本村との両極に分れるようである。

近世になって栗林村の慶長の森検地(1602年)では、173石6斗4升6合、元和7年(1621)の福島正則領216石2斗8升4合となっており、次第に開発が進んだことを示している。また栗林の共有文書を見ると、寛保以前(1742年ころ)の検地帳は見当たらず、大洪水で流失したものと、郷土史家金井明夫氏は書いている。そして慶応以前(1867年)の区有文書45通は、川欠・川普請・渡船に関するもので、千曲川の洪水との闘いを記している。

江戸後期には、この栗林の河岸に、千曲川通船の船着場が開設された。また北園街道東脇通りの上今井村から渡し船で、栗林に渡って安源寺の八幡宮に参詣し、小林一茶は「草花をよけてすわるや勝ち角力」の句を残している。明治3年(1870)の土今井地籍の千曲川の河道直流工事も、栗林の人達にとっては、その後の生活に大きな影響を与えている。

遺跡から発見された道路跡も旧川岸で、渡船のため東へ斜めに下りていたものが、旧川道を埋めて直線に道路が造られたのは、現泉道のできた昭和初期の頃と推定される。

主な引用・参考文献

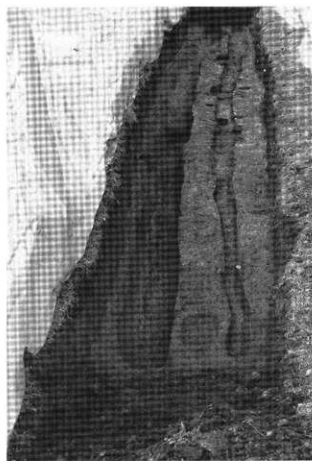
- 下高井郡役所「下高井郡誌」1922
- 神田五六「信濃栗林の弥生式石器」『考古学』6-10 1931
- 同 「信濃栗林の弥生式石器」『考古学』7-7 1932
- 長野県教委「下高井」1953
- 小野勝年ほか「第2次栗林遺跡発掘」1950
- 信濃史料刊行会『信濃史料』第一巻 1956
- 桐原健「栗林式土器の再検討」『考古学雑誌』49-3 1963
- 「シンポジウム弥生文化の東漸とその発展」『長野県考古学会誌』5 1963
- 林茂樹ほか「長野県中野市栗林遺跡第3次調査概報」『信濃』Ⅲ18-4 1966
- 笹沢浩「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』Ⅲ23-12 1971
- 同 「弥生土器-中部高地1~3」『考古学ジャーナル』131・133・134 1977
- 中野市教委「栗林遺跡確認緊急調査報告書」1980
- 同 「栗林遺跡第4次発掘調査」『高井』56号 1981
- 中野市役所「中野市誌」自然編 1981
- 同 歴史編 1981
- 中野市教委「栗林遺跡第5・6次発掘調査」『高井』64号 1983
- 上高井郡高山村教委「藤沢窯跡」1985
- 飯田市教委「恒川遺跡群」1986
- 中野市教委「栗林・浜津ヶ池」1987
- 日本第四紀学会編『日本第四紀地図』1987
- 佐久市教委ほか「北西ノ久保」1987
- 長野県「長野県史通史編」第一巻原始・古代 1989
- 同 「長野県史・考古資料編」主要遺跡北、東信 1987
- 同 遺溝・遺物 1988



↑1 東から見た栗林遺跡



↑2 西から見たD1の土器集中

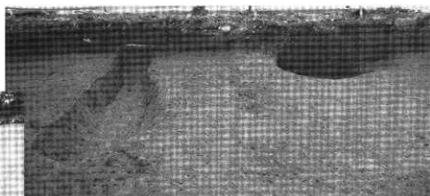
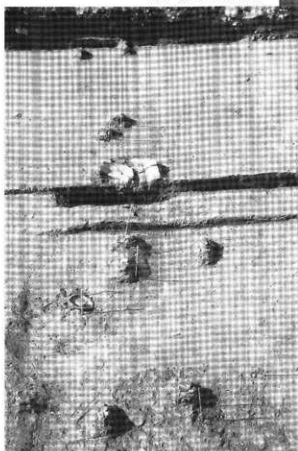


↑3 東から見たD2の溝址

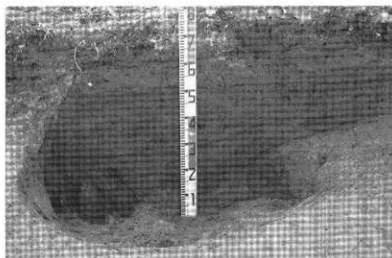


↑ 4 A地点の遺構検出

↑ 6 第4号溝の検出

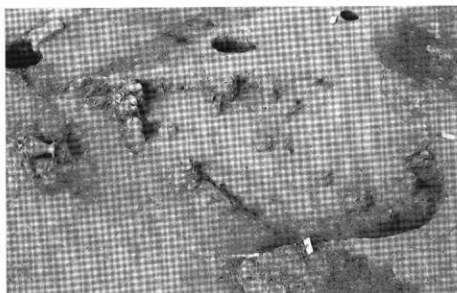


↑ 5 第4号溝址と第2号土坑



↑ 7 第2号土坑の断面

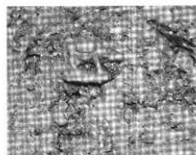
→8 南から見たB地点



←9 第1号土坑



↑10 井戸の遺物検出



↑11 同線起物荷牛の検出